

「場」こそが介護である

——スマートホームおじさん「僕の頭の中のちゃぶ台」が示す、ICT時代のケアの本質

はじめに——消えていく「なにか」

国は介護現場の ICT 化を強力に推進している。記録のデジタル化、センサーによる夜間見守り、ロボットによる介護補助。どれも慢性的な人手不足への合理的な解答だ。私もスマートホームを究極まで追求してきた一人として、テクノロジーの力を深く信じている。

しかし現場では、こんな声を耳にする。

「なにか大切なものが失われていく気がする」

この感覚は正しい。そして、その「なにか」に名前をつけることが、これからの介護設計に最も必要なことだと私は考えている。

当事者として気づいたこと

私が脳出血で倒れ、半身不随となったのは 2020 年のことだ。社会福祉士として 10 年以上、成年後見業務を中心に支援する側に立ってきた私が、突然ケアを受ける側になった。

回復の過程で私を支えてくれたのは、最新のスマートデバイスではなかった。妻が毎日着替えを持って病室に来る、その時間だった。仲間が顔を見せに来る、その瞬間だった。

理論ではなく、体で知った。

ケアの本質は、記録できない場所にある。

「場」とは何か

「場」とは形がない。具体的な何かではなく、行為そのものでもない。頭と心の中にある、主観的な「記憶」だ。

しかし、その記憶は生きた力を持つ。過去を振り返ったとき、「自分はその場所に確かにいた」「あの人が来てくれた」という記憶は、「自分は価値ある存在だ」という感覚を静かに支え続ける。自己肯定感の土台は、こうした記憶の積み重ねによってできている。

一度「場」を失うと、取り戻すことは難しい。意図して再現しようとしても、なかなかできない。それほど、かけがえのないものだ。

ちゃぶ台が教えてくれること

かつて日本の一般家庭では、家族が集まっても各自の御膳でバラバラに食べていた。ちゃぶ台の登場が、初めて家族が同じ料理を囲む食卓を生んだ。

ちゃぶ台は単なる家具ではない。「場」を生み出す装置だった。家族間の階層化されたヒエラルキーをフラット化し、有機的なドラマを生んだ。デザインひとつで、行動様式から人間関係までが変わった。

私はこれを「ちゃぶ台メンタルモデル」と呼んでいる。場を設計すること。それが介護においても、最も根本的な問いになると考えている。

ICT 化が消すもの

センサーが夜間の見守りを自動化するとき、深夜の廊下で交わされる介護士と入居者の 5 分間の対話は消える。その対話の記憶が、入居者の「誰かがいてくれる」という感覚を何年も支えていたとしたら？

記録がデジタル化されるとき、利用者の家族が受け取る手書きの一言メモはなくなる。「今日、〇〇さんが笑顔で食事されていました」という走り書きを、財布に入れて持ち歩いていた家族がいたとしたら？

効率化によって消えるのは「無駄」だけではない。「場」もまた、静かに消えていく。

引き算のデザインという発想

スマートというと、足し算と掛け算が賞賛されがちだ。機能を増やす、連携を増やす、自動化を増やす。しかし、引き算のデザインを成立させることは、足し算よりもずっと難しい。便利にし過ぎず、あえて不便さのざらつきをそのまま残す。その摩擦が「場」を発生させる。ICT 化を否定しているのではない。私自身、スマートホームテクノロジーなしには今の生活を送れない。言いたいのは、順番の問題だ。

テクノロジーは「場」を代替できない。テクノロジーは「場」を守るために使うべきだ。

現場への提言

介護現場で ICT 導入を設計するとき、一つの問いを加えてほしい。

「この導入によって、利用者と介護者の『場』は守られるか」

効率化の指標だけでなく、「場の密度」を設計の評価軸に加えること。どの業務を自動化し、どの業務をあえて人の手に残すか。その選択こそが、これからの介護の質を決める。記録はデジタル化してよい。しかし、その記録を読んだ職員が利用者に「昨日、お孫さんのこと話してくれましたね」と声をかける時間は、絶対に守らなければならない。それが場だ。スマートであることと、ちゃぶ台があること。この二つは矛盾しない。むしろ、スマートな現場ほど、意図的にちゃぶ台を設計する必要がある。

・・・おわりに

私は今、電動車いすに乗り、スマートホームデバイスに囲まれて生活している。テクノロジーは確かに、私に自由と尊厳を返してくれた。

しかし振り返ったとき、私の背中を押してくれるのは、病室に来てくれた仲間の顔だ。妻の声だ。数十年前、幼少期に家族でちゃぶ台を囲んだ記憶だ。

介護とは、その人の「場の記憶」を守り、新しい「場」を一緒に作り続けることではないか。

これからの・・・・・・はじめに

KAiGO PRiDE からはじめること

介護職はテクノロジーに仕事を奪われる存在ではない。「場」を設計できる唯一の存在だ。IT の技術だけでは解決できないものを創っているんだ。それゆえ、介護職は「誇り高く自信をもって仕事をすることができるはず」と信じよう。

KAiGO PRiDE がそこに存在する。

藤川成康（ふじかわ なりやす）

社会福祉士・介護福祉士。新潟県三条市在住。2020 年に脳出血で半身不随となり、スマートホームと社会福祉の双方を当事者として経験する。成年後見業務において「藤川モデル」「新潟モデル」を確立。現在は「スマートホームおじさん」として、福祉とテクノロジーの接点を発信している。